

Investigation into the causes of indwelling
urethral catheter implementation and its
effects on clinical outcomes and health care
resources among dementia patients with
pneumonia retrospective cohort study

前田, 俊樹

<https://hdl.handle.net/2324/1806862>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名：前田 俊樹

論 文 名：Investigation into the causes of indwelling urethral catheter
implementation and its effects on clinical outcomes and health care
resources among dementia patients with pneumonia
A retrospective cohort study

(肺炎を有する認知症患者における尿道留置カテーテル施行の要因とその
留置が臨床アウトカムおよび医療資源に及ぼす影響の検討)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は認知症を有する高齢者に関連した文脈要因を調査し、さらにそのカテーテルの留置が患者の死亡、在院日数、医療費に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。研究のデザインは後ろ向きコホート研究で、75歳以上で認知症を有し、かつ主傷病が肺炎で入院し抗生剤投与がなされた患者4501名を対象とした。アウトカムは患者の死亡、在院日数と総医療費とし、尿道留置カテーテル使用群と非使用群で比較した。本研究において尿道留置カテーテル使用群で死亡の増加、在院日数の延長、総医療費の増加と有意な関連を認めた。尿道留置カテーテルの使用パターンは医療施設内で類似性が認められた。また、病床あたりの医師数（医師密度）が有意に尿道留置カテーテル使用と関連を示していたが、その関係性は単純な線形関係ではなく、おおよそ中間層で留置頻度が最低となり、医師密度が低値、高値の両方向へむかうに連れて留置が増加するといったU字の関係性を示していた。本研究により、認知症を有する高齢者において施設間で尿道カテーテル留置においてばらつきが存在し、さらに留置カテーテル使用は死亡および医療資源利用の増加と有意な関連をもつことが示された。これらの知見より、日本の高齢者に対する医療の質の問題点が存在する可能性が示唆され、医療政策学的にも医療の質を測定し、報告し、改善を促進するような枠組みの構築が急務であると考えられた。